

編集後記

今年もまたどうか『木簡研究』第九号を、会員各位のお手もとにとどけられそうである。

今年は前年よりやや頁増となり、内容的にも充実させることができた。ことに大庭脩氏からは、すずんで漢簡冊書復原の貴重な論考を寄稿していただくことができた。また、稲岡耕二氏には昨年の研究集会の報告をまとめて寄稿していただいた。おかげで、豊かな内容のある誌面をつくることができた、両氏に深く感謝したい。

また東野治之氏は正倉院伝来の木簡についての論考で、第八号所収の原秀三郎論文に関説したものである。さらに佐藤宗諄・橋本義則両氏は、木簡研究編集の実務のかたわら、数少い日時をさいて、漆紙文書の現状についての調査を行い、その報告を本号に収録することができた。

一九八六年出土の木簡については、今回も各発掘担当、執筆者各位には、御多忙のところ寄稿していただき、例年どおり充実した内容をのせることができた、執筆者各位に厚くお礼をのべたい、また原稿の校正の際には、頁数、体裁その他の点で、かなり執筆者に御迷惑をかけたところもある。誌上をかりてお詫びしておきたい。

本誌も号数を重ねるごとに、この年度ごとの新出木簡の報告部分は、

釈文の表記、誌面の体裁などについて改善を、すこしづつかさねてきた。その結果、多少安定したスタイルになりつつあるので、一旦執筆していただいた原稿に、編集部で多少手を入れさせていただいたのは、このスタイル上の調整のためである。

『木簡研究』の編集がおわると、ほんと安心して新年がむかえられるという年が毎年くりかえされており、編集にかかわるものとしては、その年の区切りとして感銘深いものがある。しかし、編集を担当しているものも、若い活力のある人へと次第にきりかえていった方が良いにきまっている。会員各位の中でそれなら是非手つだっても良いという方があれば、喜んでおむかえしたい。また、年長の会員の方々からも本誌の編集についての、御叱声や、御教示を是非いただきたい。本誌の編集をマンネリ化させないためにも是非ともお願いしたい。もちろん論考をすずんで寄稿していただくについても、願うところに切なるものがある。

(鬼頭清明)